

全体の感想

校長先生方と話をしていたので、いつもならグループ協議をしている間に話す内容を考えるのだが、少し乱暴な話になると思う。

資料を用意した。どちらかといえばもう聞き飽きた話かもしれないが、アクティブラーニング、「主体的で対話的な深い学び」について確認しておきたくて持ってきた。最近では文科省もちゃんとした問題意識を持ってきている。最近では議論がまともになってきている。中身のある話をするようになった。これはたぶん、文科省が、授業というのは教えるものだという考えから、学びが授業の中心だというふうに明らかに考え方が変わったと思える。協同学習がずっと言ってきたことである。その一番の原因は、おそらく、教育心理学者が文科省に多人数入るようになったからである。心理学には学習心理学というのがあるから、学習のことしか考えていない。どちらかといえば、教える方は考えていない。だから、学習というものに対するセンスが、文科省はずいぶん良くなったように思う。それを軸に出してきたのが「アクティブラーニング」である。今まで文科省が使った言葉の中で「ラーニング」という言葉がきちんと大きな言葉で使われたのは、これがはじめてである。それまでは、「習熟度別指導」「少人数指導授業」と、文科省は「指導」が教育だと思っていた。その意味で、学習の心理に沿った話で、納得のいくものが出てきた。それは、ずっと教育心理学が担当してきた協同学習と近いのは、そこがあるからである。

2枚目の上のところに図があるが、印刷だと色が出ていないので分かりにくいですが、そこも含めてちょっと説明したい。真ん中に、「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」というのが連続して書かれている。この3つのワードにそれぞれ色の違った虹のような形になって、矢印が右上の「三つの柱」に向いている。これが何かというと、「三つの柱」の方は究極の目標であり、「生きる力」である。それが最近この「三つの柱」で言われている。もちろんこれは、受検の知識だけではなく、新しい時代に必要とされる学力として練られてきている。「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」の3つがここを指しているのは何かというと、主体的な学習活動によってこれを目指そう、対話的な学びによってこれを実現しよう、そして、深い学びによってこれを実現しようという等価な手立てだということを示しているのである。ついつい我々は、「主体的で対話的な学び」によって、「深い学び」をつくろうと、「深い学び」は目標だと考えてしまいがちだが、「深い学び」も手段である。そういうふうに考えると、「深い学び」とは何かといういろいろな議論があった。僕も何だろうと考えていたが、最近分かった。文科省はそんなに難しいことは考えていない。要するに、知識・理解がゴールの教育ではだめだということである。それを活かす活動が含まれた、そういう組み立てで授業をやりましょうということである。簡単に言ってしまうと、授業の中に、「なぜそうなるの？」ということが入っているような授業、それが「深い学び」だというふうに考えれば、今日の授業は相当深い学びが入った授業であると言える。教師が意図した内容以上のことが生徒から出てくるような学びなどというのは簡単にはできはしない。知識・理解から一歩踏み出した授業であればよい。この前、小松市の中学校に行ったが、「秀吉は太閤検地をなぜやったか、その成果はどこにあるだろうか」という授業をしていた。これは深い学びである。そうとらえれば、非常に実質的で意味のある授業ができていく。だから、位置付けとイメージはそういうものだと思って進めていけばいいと思う。それに対応する学習指導論としては、協同学習というのはけっこういけるのではないかなと思う。

今日の授業研の中身についてであるが、〇〇さんが言ったように、けっこうみなさんの気付きというのがたくさんあったので、あまり話すことがないなという気がする。だから、重複する部分もあると思うが、杉江も言っていたと思って聞いてほしい。子どもの学びを促すためにどうすればいいのかということで、聞いていて、「なるほど、そういう視点もあるのか」と思いながら聞いていた。

各授業の感想

< 3限家庭：〇〇先生 >

家庭科の授業も数学の授業も、普通の水準からいったらなかなか良い授業だったと思う。授業者の自評で先生が言われたが、「次の時間に献立をつくるが、いい献立だったら給食に採用されるかもしれない」というのは、単元の第1時に言われた方が良い。生徒のモチベーションを高める仕掛けになる。単元の第1時に単元の値打ちを高めるためにそういうやり方は良い。以前、小学校だったが、小学校1年で、働く車を扱う単元があり、どんな車か書いて絵を描いたりする。名張の小学校では、それを「一人が1枚書いたらそれを綴じて1年間図書館に入れるよ。それを次の年の子に見てもらおう。」というふうにされた。そうするとやる気が出る。そういう仕掛けとして使えたのにも思った。この時点で言うのはもったいないと思った。(〇〇先生：単元の第1時にも伝えた。) そういう工夫も大事だと思った。

導入というのが、この1時間の全貌を生徒にはかっていたというのは良かったと思う。アクティブラーニングの大前提は、学びの構えをつくらせることだから、ここに力を注ぐのはとても大事なことである。

一般的に他の学校の先生に言わせると「課題が長ったらしい」となるだろうが、いつも言っているとおり、課題は端的に書くのは望ましくない。たとえ長くなっても、生徒に伝わるようにきちんと書くべきである。端的に書くと何をやるのかが分からない。先生だけが分かっている状態になる。もちろん表現の工夫は必要かもしれないが、表現が長いということは決して悪いことではない。ただ、個々の課題で思ったのは、表を満たしていくということにもうちょっと上乘せしてもいいのではないかと感じた。おいしく食べられるメニューとかそういうものがあつた方がかえって考えやすくなったのではないかという気がする。ただ品目だけ増やしていくとってしまった生徒もいたのではないか。例えば、朝ご飯はパンメニューで、夕飯は煮物とか決めておけば考えやすかつたのかもしれない。そうすると、生きた形での $+ \alpha$ ができて、もうちょっと楽しくなつたのではないかと思う。

長い課題を生徒に示して、すぐ次に入ってしまった。先生も緊張されていたかもしれないが、生徒がこの長い課題を捉え直す数秒がほしかつたなと思った。スッと流れていった印象だつた。1回で読み取れなかつた子は困つたのではないかと思った。

配慮すべきポイントや、考えるにあつて生徒がきちんと正解できるための情報、成功のための手がかりというのをいろいろなところで工夫しておられた。あれは良かった。ただ自分で考えなさいではなく、いろいろなヒントを与えられていたのは良かった。勉強では困らせるのではなく、できるだけ成功させたい。でも、自分ができたのは先生がヒントをくれたおかげとは意外に気付かないで、自分の力だと思わせる。これが大事だと思う。

導入に15分かかっていた。15分かかつたことは悪いことではない。ただ、急ぎすぎると説明だけで終わってしまう。「ここが大事だからメモをとっておきなさい」というような指示があるとよい。留意点などは話をされただけだつたので、子ども達は聞いているだけだつた。なぜ子ども達はメモをとらないんだろうと思った。そのあたりも「ため」の時間があるとよかつた。

PowerPointの表示もあったが、PowerPointの表示のあたりは先生が話すのをやめて、生徒に読み取らせた方がよかったかもしれない。PowerPointの表示を読む時間がほとんどなかった。説明をするより読み取らせるという使い方をしてもよいのではないかと思う。

5分間で最初に個人思考があった。ただ、導入が15分間あったので、最初の個人思考が次にどう繋がるのかということをもう一度確認しないと、今のことしか考えないで取り組んだ子どもがいたのではないかと思う。もう一度確認すると、思い出して構えができる。

最初の個人思考は品目を足して自分の意見をつくって、班でより良いものにしていく。そういう活動だった。あのときの話し合いの仕方は、見ていると、順番に言っていく形だったが、グループによっては、誰かのものを頭を寄せ合って議論をしているというようなスタイルをとっているところもあった。僕の感覚だと、自分の考えたものをみんなに伝えていくというのはなしにして、一人ずつワークシートを真ん中に出してそれを見ながらみんなで意見を言っていく、1つずつ完成させていくというような活動をさせてもおもしろかったのではないかと思う。

グループに入ったときも、「なぜ、こうした方がいいのか。」ということについても話し合いたい。そうすると、話し合いに入るときに、「認定試験ニーズ、この班の全員が合格できるように」というようなねらいをあの話し合いのところでしっかり入れておくと、単なる数字合わせではなく、「なぜこれがあるのか」という、「なぜ」の話し合いができたのではないかと思う。最終目標といつも照らし合わせながら常にやっていく。課題意識をその都度はっきりさせていくということもできたのではないかと思った。

先生はまだこの学校が1年目だということで、机の間をまわるときの表情がとても心配そうだった。もう少し子どもに任せて、「先生が心配してるよ」という雰囲気がない方がいいのではないかと思う。最終的には、子どもの間で調整していった、単元の最後にできるようになればよい。今日は、2限の〇〇さんの授業で、最初にセッティングしてしまったら、あとは後ろの方で何もしていなかった。僕の大学の授業もけっこうああいふ感じである。最初に指示しておいて、あとは前でニコニコしているだけというような授業がけっこう多い。

最後の振り返りの自己評価で、ABCは自分に向かってつけるのだということを意識付けしてほしい。自分としてできたかどうかということである。「自分はAだと思うが、先生どうでしょうか」というふうにはしない。自分の成長は自分で調べる。それを後で先生も見せてもらうというふうな意識を持たせる。なぜかという、できばえについて、自分で自分を評価することが次の学びの意欲につながるというのが、心理学の研究成果で出ている。これはおさえておいてほしい。

<4限数学：〇〇先生・〇〇〇先生>

6月は〇〇〇さんの授業だったが、今日の授業も興味深い授業だった。数学の授業というと、先生が前で解答・解説をして分かったことにする授業が世の中で蔓延している。そういうことがない。これからの数学の授業というのはこういう形でなければいけないだろうと思う。先生が解説して分かったふりをして、実際には頭が少しも動いてない子が山ほどいる授業というのが今の世間の現状だが、今日の授業は全員が50分間頭を働かせている。ぜひ、こういう授業計画を大変だが続けていってほしい。

今日の授業では、筋道をたてて説明というところが、まさに「深い学び」につながるころだと思う。他の教科でも同じだが、教科の本質の部分というのはいつも子どもに伝えてほしい。理科であれば科学教育である。数学であれば、論理思考のトレーニングである。微分積分ができることより、論

理的にものが考えられることの方が大事である。そういった意味で、こういう本質の部分を忘れない課題づくりというのは大事である。

本時の値打ちの説明を相当詳しくされた。それは良かったのだが、ここはまだ教材研究の余地があると感じた。生徒に、「なるほど」と納得させる表現はどんな表現か、ここらへんも教材研究である。模索してみるといいと思う。

生徒が成功できる手立てというのをいろいろしかけておられて良かった。筋道が立った説明というのはどういう説明なのかというモデルがPowerPointで示されていた。「自分でよく考えてやるんだよ」ではだめ。「こうやってやると分かりやすいでしょ」という例を示すと、子どもはそれを見てその通りにはできないかもしれないけど、近付くことはできる。そして、うまい説明ができたときには、子どもは、先生がうまいモデルを示してくれたからできたとは思わずに、自分でできたと思うので自信がつく。その示されたモデルも、「より上手なモデルがあるよ」と言って、より高いゴールを示された。子どもに対する要求水準が高いというのは大切なことである。

次に、確認問題の目標を示された。クラス課題になっていた。クラス課題を示すということは、「クラスのみんなができるようになろうよ」ということとつながること。「クラスの全員が伸びることが大事だ」という意識付けの意味でも、こういうクラス目標を入れていくことはいいことだと思った。

その後、例題に取り組ませているが、「解き終わった子は筋道立てて説明できるようなまとめをしろなさい」という指示も、本時の課題と一環していい言葉がけだったと思う。

課題意識をもう一度きちんとおさえて個人思考を開始したのも良かった。たとえ最初に説明しても忘れてしまうことはある。

途中、話し合いに入ったときに、前の生徒が振り返って机2つの4人グループの形態になった。あれもスマートで良い。いつも机4つを集めなければいけないわけではない。

話し合いのようすが、4人ともしっかり向き合っていないのが良かった。中にはまだ一人で考えた生徒もいた。もうちょっと自分でやって結論を出して振り返るというのもありである。「じゃあ、やめて全員振り返りなさい」ではなく、子ども達が課題に向かっているので、自分たちのペースでやらせるのも良い。子どものようすを見て、そういう選択肢もある。話し合いにばらばらと入っていく姿がこの学校であればいい姿だと逆に思った。

アラームがあちこちで鳴ってたのも別にいいかなと思った。熱中していた生徒は、他のグループのアラームは気にならないのではないかなと思う。

最後の振り返りで花丸が22になった。あれは、「学ぶとクラスのみんが賢くなっている」ということの確認である。だから、学ぶことの値打ちというのを子ども達はあそこで知ることができたと思う。ただ、あのとき、○にもいかなかった子たちがどう思っていたかということが問題である。そこで、この学校が取り組んでいる、「単元で勝負」ということが出てくる。今は分からなくても、単元が終わるまでに分かるようになっていれば良い。今は分からなくても、単元の終わりまでに近付くぞと思えるような言葉掛け、構えづくり、それがあれば大丈夫だと思う。そういったところを細かく配慮していけばいいのではないかなと思う。全員が花丸がとれるというのは、それぞれ学習の速さが違うのだから難しいことだが、「授業の終わりまでに22人もできるようになったのだから、単元が終わるまでに自分も近付こう」と自宅学習でもしてくれればさらに良い。そういう意味でも、単元計画を生徒にも示しておくといいと思う。

< 2限の授業と学校全体について >

2時間目をずっと見たときに困った。コメントで言うことが何もないなと思った。普段に近い授業なのだろうが、子ども達はとても落ち着いているし、先生たちの指示もきちんとしていたし、子ども主体で動かすためのいろいろな工夫がしっかりなされていたと思った。

国語は単語の分類の授業だった。分類するときに、「なぜ」というのを入れておくと、「深い学び」になったのではないかと思う。

英語は連続して2つ見た。〇〇先生のフューチャーグループも良い授業だったと思う。1つおもしろいことがあった。生徒が先生に聞きに行ったら、隣の人に聞きなさいと指示された。あれはとても良かった。いちいち答えていると、生徒が先生をたよりにするようになる。

〇〇先生のクラスでは、何を書けばいいのか、どういう活動をすればいいのかというポイントはきちんと丁寧に説明しておられたので、生徒が自分から動ける仕掛けをちゃんとしておられるなど感じた。

〇〇先生の授業については先ほど話をした。最初に〇〇先生のところでおもしろいなと思ったのは、6人グループが机4つに集まって話しているということ。いたずらに面積を広げない。作業で必要なときは広げないといけませんが、そうでなければ、距離の近いところで話し合いができる。活発に話し合っている場面だった。黒板にはどうやって活動すればよいかすべて書いてあるので、自分で動ける仕掛けが良かった。

〇〇先生の社会は、丁寧な課題が書かれていた。個別の最終課題の取り組みの場面であった。ポイント以外は子どもの学習の邪魔はしない、子ども主体の学びというのを心掛けておられて良いと思った。

特別支援のクラスは個別の授業だったので、これはよく分からなかった。しかし、〇〇先生の授業では、生徒が動ける仕掛けにすごく配慮しておられるのがよく分かった。C組は子どもがあまり動いていなかったところだったのでよく分からなかった。

学校全体の授業実践というのは、非常に高いところに来ている学校だというふうに思う。毎度毎度言ってしまうが、「じゃあ、次の課題は何だろう」と。ゴールはないので、また自分も考えてみるが、共通実践の検討でも検討すべきことだと思う。

< 質問 >

Q 教科系の反省等、授業の振り返りをどうすれば良いのか。

A 今日は振り返りの場面はあまり多くは見なかった。ABCの自己評価の部分と自由記述の部分がある。自由記述の部分を書かせるときに、今日はこれについてというような振り返らせたいことを先生が言った方がいい。1単元分の振り返り表だと、自由記述の部分はせまい。だから、一律の表現になってしまう。乱暴な学校だと、「感想」とか「一言」とかだけ書いてあるものもある。それだと、子ども任せになるので、「今日は感想欄にこれこれこういうことについて書きなさい」というと、あまり的外れなことは書かない。指導案の中に入っているが、何回かに1回は集団の振り返りをさせると良い。仲間の良さを確認させるという意味で。そういう形で振り返りをさせる。いつもおきまりの文句だとマンネリ化してしまう。本時の内容に即した振り返りにしていく。いろんな工夫があると思う。